

## 看護におけるケアリング概念の検討

わが国におけるケアリングに関する研究の分析から

佐藤 幸子<sup>1)</sup>・井上 京子<sup>1)</sup>・新野 美紀<sup>2)</sup>  
鎌田 美千子<sup>1)</sup>・小林 美名子<sup>1)</sup>・藤澤 洋子<sup>1)</sup>  
矢本 美子<sup>1)</sup>

Study on the concept of caring in nursing.  
Content analysis for Japanese nursing studies on caring

Yukiko SATO<sup>1)</sup>, Kyoko INOUE<sup>1)</sup>, Miki NIINO<sup>2)</sup>  
Michiko KAMATA<sup>1)</sup>, Minako KOBAYASHI<sup>1)</sup>  
Yohko HUIJISAWA<sup>1)</sup>, Yoshiko YAMOTO<sup>1)</sup>

Abstract :

**Purpose :** It is important to classify the concept about caring, the way to intervention, and the relation between caring and nursing process. We tried the content analysis about caring.

**Method :** The subjects of this study were original papers which were searched from JAPAN CENTRAL MEDICAL REVUE by using key word : Caring. Data analysis were performed using CONTENT ANALYSIS.

**Results :** There were 31 original papers in which the key word were included. Definitions of caring were given in 11 papers. The word (caring) had many theoretical backgrounds. It was explained by various levels of concepts. Qualitative studies were classified three types from subjects of the studies. First, subjects were patients. The purpose of these studies was to clarify the behaviors of caring and necessary conditions of nurses. Second, subjects were interactions between patients and nurses. These studies were analyzed about outcomes by caring. Third, subjects were students and teachers in nursing practice. These studies were dealing with the problems of nursing educations.

**Discussion :** The word (caring) had many theoretical backgrounds. And, it was explained by various levels of concepts. These results suggest that we need to construct the middle range theory of caring.

**Key words :** Caring, Content analysis, Nursing education

### はじめに

看護学は実践の科学であり、その実践の方法論としては、看護診断分類を使用するしないにかか

わらず、看護過程を取り入れている場合が多い。特に看護学の基礎教育では、人間を様々な角度からアセスメントし、統合し、看護診断をして、計画的に看護上の問題を解決するように実践評価す

1) 山形県立保健医療大学看護学科  
〒990-2212 山形市上柳 260  
Department of Nursing, Yamagata Prefectural University  
of Health Sciences  
260 Kamiyanagi, Yamagata 990-2212, Japan

2) 慶應義塾大学看護医療学部  
〒252-0816 神奈川県藤沢市遠藤 4411  
Faculty of Nursing and Medical Care, Keio University  
4411 Endou Fujisawa, Kanagawa 252-0816, Japan

る看護過程を実践の方法論として教育している。看護過程を導入することで、論理的で根拠に基づいた実践が確保されてきている<sup>1)2)</sup>。

しかし一方で、部分として人間を細分化してアセスメントすることで、人間を統合体としてとらえきれぬのか、人間対人間の関係性の中で進行する感情のやり取りを無視しているのではないかなど新たな疑問が生じてきている。これは、人類社会を自然科学的価値観が支配する一元的な発想への批判や QOL などの人間性の回復が叫ばれるような社会全体の動きとも連動していると思われる<sup>3)</sup>。そのような中で「ケアリング」が強調される時代となってきた。「ケアリング」ということばは一般的で気軽に使用され、人類の歴史の中で欠くことの出来ないものであるのに、ごく最近までほとんど学問的に注目されてこなかった<sup>4)</sup>。広辞苑、看護辞典や医学辞典にも「ケアリング」という言葉は存在していないという事実からも、学問的な概念として明確化されてこなかったことが読み取れる。

看護においても、ケアリングの概念は看護の中核としてナイチンゲールにさかのぼるといわれているが<sup>5)</sup>、その中においても「ケアリング」という言葉は使っていない。現在も「ケアリング」という言葉は、様々な意味で多くの分野で使用されている。看護実践においては、「ケアリング」は看護過程のような実践の方法論とはまったく別の次元で語られており、どのように「ケアリング」の概念を看護実践の中に取り入れていくのか、またそれを教育するのは、いまだ明確化されていない。論理的な思考プロセスは伝えられやすいが、人間関係の過程でおこる感情のやり取りなどケアリングに関連する概念化がすすんでいないため、論理的な思考プロセス以外のケアリングに関連が強い部分は伝えられにくくなっていると思われる。中柳<sup>6)</sup>は1956年から1996年までの文献をMEDLINEにより検索し、「ケアリング」の概念分析を行ったが、概念はいまだ統一して規定されておらず、看護独自の介入の方法は今後の検討課題だとしている。橋<sup>7)</sup>もMEDLINEとCINAHLより文献検索し分析しているが、英語圏の研究と日本の研究の比較の必要性を述べている。また樋口<sup>8)</sup>はこの「ケアリング」の概念が文化によって異なるのかどうか不明確であることを指摘している。

以上のことからわが国において「ケアリング」の概念・介入方法の確立や、現在教育している看護過程との関連を明確化していくことが必要である。今回はその基礎的資料とするため、わが国における「ケアリング」に関する研究の動向より、概念分析を試み、今後のケアリングに関する教育の方向性を検討する。

## 対象及び方法

対象は1983年から2002年の医学中央雑誌にて「ケアリング」というキーワードで検索された原著論文とした。原著論文としたのは、解説や総説ではなく、研究論文を分析するためである。検索は2002年7月に行った。「ケアリング」のほかに「ケア」というキーワードもあるが、「ケア」という言葉は介護という意味にも使われ、今回扱う「ケアリング」とは異なる概念で使われることが多いため、今回は検索には使用しなかった。同様に「看護ケア」という言葉も使用範囲が広域でありすぎるため、検索からはずした。

分析方法は、内容分析的手法を用い、研究の対象、方法、「ケアリング」の理論的背景、研究の分析内容を中心に分析し、「ケアリング」概念の明確化を試みた。分析は研究グループで分析の方法を検討し、1人の研究者が中心に分析したものを共同研究者で確認した。

## 結 果

### 1. 論文の年次推移

1983年から2002年の医学中央雑誌にて検索された原著論文は31編であった。その年次推移は表1に示すとおりである。1994年までは原著論文の範囲でありながら内容は総説や講演内容をまとめたものであり、研究論文が出されたのは1995年以降であった。研究の種類としては1997年以降に質的研究が16件と多く、量的研究は4件で、1990年代に多かった。

### 2. 「ケアリング」の定義と理論的背景

総説や講演を除く各研究論文は20件であり、その中で記述されている「ケアリング」の定義は表2に示す通りで、定義が明記されていたのは11件であった。それぞれ理論的背景は多様であり、また、同じ理論的背景でも異なる概念で「ケアリン

グ」という言葉が使われていた。これらの定義には大きくとらえて2種類のキーワードが含まれていた。それは自己実現や成長という目標となるキーワード（表中下線）と、共感や気遣いや思いやりなど看護師の心情・態度や人間関係の現象を表すキーワード（表中網掛）の2つに分類された。

### 3. 量的研究の概要

量的研究の概要は表3に示したとおりで、4件の研究の対象は病院に勤務する看護師や患者であり、研究内容としてはケアリング行動となる看護ケアを明確化するもの（文献18, 20）や看護の質を評価するもの（文献19）、ケアリング行動の自己評価に関するもの（文献8）であった。文献18では

表1 原著論文数の年次推移

年	原著論文数	内 訳		
		総説・講演	質的研究	量的研究
1989	2	2		
1991	1	1		
1992	3	3		
1993	4	4		
1994	1	1		
1995	2			2
1997	2		1	1
1999	3		3	
2000	9		8	1
2001	3		3	
2002	1		1	
計	31	11	16	4

表2 記述された定義と理論的背景

ケアリングの定義	提唱者
一人の人格をケアすることとは、最も深い意味でその人が成長すること、自己実現すること	メイヤロフ
ケアリングの焦点は他者を成長させる点	ローチ
気遣い	ベナー
ケアリングは人間の存在様式であり、思いやり、知識・技術を伴う能力、信頼、良心、専心に特徴づけられる	ローチ
患者/クライアントと看護師との人間関係の重視および実際の行動と精神的関わり	筒井
一人一人の人に対して共感的に相手の心の動きにききいりより良く、より深くその人の心の中を知ろうと勤めること	田畑
他者にケアをしたいと思う心、態度、動機づけ。他者に固有のニードを知り考慮すると共に、その人を一人の人間として尊重し認めていることを表現するような方法で反応し、最後には相互に分かち合うこと	川野
女性自身が生き方、生活を変化させながら健康を獲得することを支援する技術	メイヤロフ、レイニンガー、ワトソン、スワンソン
ニードを持つ対象に対して関心を持って支援・援助し、本質的に対象の自己実現を助ける力を持つかわり	メイヤロフ、スワンソン
ケアリング関係は意識的に無意識的に人々に「よい」ものであると認識される人間の状況	ノッティング
患者と看護師間におけるケアリングとは、看護師が患者を独自の存在として相対し、患者の感情、思いを認め、個別の看護ケアを提供する一連のプロセス	独自の定義

表3 量的研究の概要

文献番号	対 象	方 法	理論的背景	分析内容
8	癌患者が多い8つの総合病院に勤務する看護師500人	質問紙	筒井	ケア不安とケアリングに対する自己評価との関連を明らかにする
18	3つの病院の患者281人、看護師323人	質問紙	独自の定義	患者と看護師が重要であると思うケアリング行動を明らかにする
19	プライマリーナーシングを導入した2つの病棟に勤務する看護師114人	介入実験研究	なし	プライマリー・ケアの導入前後の直接ケアの時間数を比較する
20	20の施設の師長72人、スタッフ看護師1,321人	質問紙	なし	看護ケア72項目について、患者にとって良い結果となる看護ケア明らかにする

看護師が行うケアリング行動について、患者は看護師の専門的知識、技術に基づいた適切で安全なケアの提供を重要なケアリング行動として認識し、看護師は患者の精神面への働きかけに関する内容を重要なケアリング行動と認識している傾向を明らかにした。文献20では患者に良い結果をもたらすことへの影響度について因子分析により6つの因子を抽出した。すなわち 患者の持つ力をいかに支える、患者を取り巻く状況を整える、患者を楽にする、目的を意識して働きかける、患者と向き合う、看護体制を整えるの6因子である。また、看護実践において現在すでに実践しているにもかかわらず、概念化されていないために認識されていないケアがあり、ケアリングの実践への体系化が課題であることが示唆されていた。文献8では看護者のケアリング的要素についての自己評価はレベルが低く、経験者が体得している実践的ケアリング能力やその活用方法などについての研究の必要性が示唆されていた。

4. 質的研究の概要

質的研究の中で1件は海外の文献の文献研究であった(文献4)。その他15件の国内の研究の概要は表4に示した。

研究の対象が患者であり、面接調査でケアリングとなる看護ケアや看護師の要件を抽出したものが3件あった(文献15, 16, 17)。文献15では終

末期のがん患者にとってケアリングとなった関わりは、(1)ケア提供者への信頼が深められるケアリング、(2)サポートされていることに気づくことができるケアリング、(3)希望が支えられるケアリング、(4)自己の限界を受容しながら苦難に立ち向かえるケアリング、(5)自己の安定が保たれるケアリングの5項目であった。文献16で抽出されたケアリング項目は意図的タッチ、積極的傾聴、存在、場所の選択、良い評価の5つであった。また、文献17で抽出されたケアリングを成立させる看護師の要件はノルマ・マニュアルを超えた対応(態度、時間的対応、技術的能力)と高いモラル(謙遜、熱意、意欲)であった。看護師を対象にどのようにケアリング行動が発達したかを分析したものは1件であった(文献14)。その発達のプロセスは受け身的ケアリング行動の種子期、患者寄り添い型消極的ケアリング行動の萌芽期、患者受容型積極的ケアリング行動の開花期、回避的ケアリング行動の停滞期に分類されていた。

対象が患者と看護者の関わりであり、その介入結果をケアリングの観点から分析したものは4件であった(文献1, 9, 11, 12)。文献9は終末期のがん患者にマッサージを行いその効果がケアリングであったと考察している。文献11は術前訪問の場面をプロセスレコードに再構築し、看護師の対応をケアリングの観点で分析した。そのケアリングの項目として沈黙に添い待つこと、非言語的

表4 質的研究の概要

文献番号	対象	方法	理論的背景	分析内容
1	精神障害患者1事例	事例研究	スワンソン	ケアリングのカテゴリーを用いて場面を分析
2	小児看護実習の指導者5人と学生5人	指導場面のプロセスレコードの分析	メイヤロフ	ケアリング出来た場面出来なかった場面の紹介
3	痴呆性高齢者3人	参加観察法	ローチ	高齢者の行動の意味がケアリングであった
5	母性看護学実習	実習指導のポイント	ベナー	ケアリングを目指した課題設定
6	母性看護学実習の学生1人	指導場面の現象学的分析	ベナー	気遣いに基づいたケアの実例。気遣いの意味
7	看護学実習の学生4人、教師1人	ケアの経過	ローチ	どのようなことがケアリングの教育になるのか
9	がん末期患者1人	マッサージによる介入	なし	マッサージがケアリング効果を持つ
10	人工肛門患者4人	MMPIによる精神健康度	田畑	ケアリングの必要性を示した
11	食道癌1人	術前の不安への対応をプロセスレコード	川野	傾聴がケアリングであった。(ケアリングの場面を示した)
12	ターミナルケアの必要な患児12人	ロイに沿った看護介入	なし	看護介入がケアリングであった
13	助産学専攻の学生9人	女性との相互作用の場面	レイニンガー, ワトソン, スワンソン, メイヤ	ケアリングの教育上の手がかりを明らかにした
14	精神科看護師12人	面接(患者に対する働きかけと患者のとらえ方)	野嶋のケアリング行動	精神科におけるエキスパートナースがどのようなケアリング行動をとっていたか
15	終末期がん患者8人	参加観察法, 面接	メイヤロフ, スワンソン	がん患者にとってケアリングとなった看護師の関わり
16	看護診断「悲嘆」を診断された患者3人	面接	なし	ケアリングとなった看護内容
17	慢性難治性疾患患者22人	参加観察法, 面接	ノッティング	良い看護(ケアリング)の内容

(文献研究1件を除く)

コミュニケーション，患者のそばに座る，保障し励ます，感情を代弁し明確にする，場所を選ぶ，泣くことを肯定し慰める，希望の後押しがあげられた。文献 12 では CCU においてターミナルケアを必要とした子どもに対してロイ適応看護モデルに基づき，アセスメントを行い，看護ケアを計画実施した。その看護介入は症状のコントロール，十分なインフォームド・コンセント，患者と家族を引き離さない，十分なコミュニケーション，理解的態度，その人らしさの尊重，環境の整備，生きがいの支援，蘇生術の検討，宗教的アプローチであった。これらの介入の結果良いケアリングができたことを報告している。

実習指導場면을対象にして，ケアリングの教育について研究したものは 5 件であった(文献 2, 5, 6, 7, 13)。文献 2, 6, 7 は学生と指導者あるいは学生と患者のやり取りの場면을ケアリングの観点から分析したもので，分析の観点は理論的背景を持ち，その観点から評価できる言動を指摘している。文献 5 はケアリングを重視した母性実習の試みの報告であり，「出会い」と「関わり」を重視し，「学生がクライアントに巻き込まれる」ことを目指したものであった。

## 考 察

### 1. 論文の年次推移

今回は医学中央雑誌で検索可能な 1983 年から 2002 年の原著論文を対象としたが，1994 年頃までは総説や講演であり，ケアリングの概念を広く知らせる役割を果たしていた。1980 年後半から 1990 年前半は日本に看護診断分類が普及されてきた時期と一致し<sup>9)</sup>，看護診断分類を使用しても人間対人間の関わりが重要であることを強調しなければならないというバランス感覚が働いていたものと考えられる。すなわち看護は科学的に推論して根拠に基づいて進める必要と，人間的な関わりが重要視される二つの側面があるということである。

また，1995 年以降は研究論文が多くなったが，その方法論としては質的研究が多かった。ケアリングは人間対人間の関わりであり，また概念そのものを探求する段階のものが多く，因子探索研究が多くなっていると考えられる。

### 2. ケアリングの定義と理論的背景

表 2 に示されたように，看護研究において多くの理論家の多くの定義が使用されていた。中にはそれらの理論家の定義を受けて独自の定義をしているものもいた。その定義は大きく 2 つのキーワードが含まれていた。それは自己実現や成長という目標となるキーワードと，共感や気遣いや思いやりなど看護師の心情・態度や人間関係の現象を表すキーワードであった。ワトソン<sup>10)</sup> は「看護におけるヒューマンケアの進め方を，人間性重視の哲学の上に立った有意義な実践であり，それによって人間性を保持していくことができると考えるようになった」と述べている。この人間性を保持していくという言葉の意味の中には，ケアリングの「癒しや気遣い」と「自己実現や成長」という概念が含まれているとも解釈できる。レイニガー<sup>11)</sup> は，「人間が成長し，健康を保ち，病気を免れて生存し，あるいは死と直面するうえで最も必要とするのはヒューマンケアリングである」と述べ，また，「ケア，またはケアリングのパターンは，介助的・支持的・促進的・実際の行為を含んでいる」としており，やはり 2 つの概念が含まれていると解釈できる。メイヤロフ<sup>12)</sup> は「1 人の人格をケアすることは，最も深い意味で，その人が成長すること，自己実現することを助けることである」と述べているが，「ケアにおいては，成果よりも過程が第 1 義的に重要である」と述べている。「自己実現」は成果を示す方向性であり，その過程が「関わりそのもの」であると考えられる。以上のように，ケアリングという言葉は，多くの様々な定義と理論的背景を有しているがその核心となるキーワードは，自己実現・成長と気遣い・共感・人間関係などであると考えられる。

### 3. 量的研究について

量的研究ではケアリング行動をあらゆる質問項目で質問する形式が 4 件中 3 件であった。中でも文献 18 は看護師とともに患者にもケアリング行動を質問しており，「患者は看護師の専門的知識，技術に基づいた適切で安全なケアの提供を重要なケアリング行動として認識し，看護師は患者の精神面への働きかけに関する内容を重要なケアリング行動と認識している」というように両者の認識のずれがあり，興味深い結果であった。看護師は

受容的な態度で傾聴し, 精神面への働きかけを重要視しているが, 患者にとってそれらは意識されず, むしろ確実な技術や知識などに安心や安全性を感じているということであり, これは専門職が通常見過ごしがちなケアリングの重要な側面を示していると思われる。すなわち, レイニンガー<sup>11)</sup>が「ケアリングのパターンは, 介助的・支持的・促進的・实际的行為を含んでいる」と述べているように, 毎日の实际的行為が重要であり, その過程そのものがケアリングでありえるということをサポートしていると考えられる。また, 患者のケアリングという言葉の理解度, 患者の健康レベルによる感受性の差異も考慮に入れる必要があると思われる。

また, 看護師のケアリング行動に対する認識は文献 18 だけでなく, 文献 20 でも見られるように, ケアの理想を反映していると考えられた。これらの理想化されたケアリング行動が, 实际的行為としてどのような技術をとおして具現化されているのか, ケアリング技術の体系化の必要性が示されており, 今後研究がまたれる領域である。

#### 4. 質的研究について

研究の対象が患者であり, 面接調査でケアリングとなる看護ケアや看護師の要件を抽出したもののにおいて抽出されたカテゴリーは, 文献 15 では, (1)ケア提供者への信頼が深められるケアリング, (2)サポートされていることに気づくことができるケアリング, (3)希望が支えられるケアリング, (4)自己の限界を受容しながら苦難に立ち向かえるケアリング, (5)自己の安定が保たれるケアリングの 5 項目であり, 文献 16 では意図的タッチ, 積極的傾聴, 存在, 場所の選択, 良い評価の 5 項目であり, 文献 17 で抽出されたケアリングを成立させる看護師の要件はノルマ・マニュアルを超えた対応(態度, 時間的対応, 技術的能力)と高いモラル(謙遜, 熱意, 意欲)であった。抽出されたカテゴリーはそれぞれ各理論的背景に基づき重要なものである。しかし, 現時点ではそれぞれの研究において抽出されたカテゴリーのレベルや観点が多様であり, それらの統合や体系化がすすんでおらず, どのように位置づけて実践の指針にしていけば良いのかが不明確である。中柳<sup>6)</sup>は MedLine の検索によりアメリカを中心とした文献検討を行っているが, その中でもケアリングの中

範囲理論の必要性を強調している。今回の文献検討においても, ケアリングに関する研究は確実にすすんでおり, この成果に基づく中範囲理論の開発が, ケアリングを教育し実践する上で, 重要であると考えられた。

対象が患者と看護者の関わりであり, その介入結果をケアリングの観点から分析したものにおいてもケアリング行動として, 文献 11 では, 項目として沈黙に添い待つこと, 非言語的コミュニケーション, 患者のそばに座る, 保障し励ます, 感情を代弁し明確にする, 場所を選ぶ, 泣くことを肯定し慰める, 希望の後押しがあげられた。文献 12 では症状のコントロール, 十分なインフォームド・コンセント, 患者と家族を引き離さない, 十分なコミュニケーション, 理解的態度, その人らしさの尊重, 環境の整備, 生きがいの支援, 蘇生術の検討, 宗教的アプローチがあげられ, これらの項目を組織化・体系化していくことが今後の課題であろう。

実習指導場面においては, ケアリングをどう教育するかという観点と, 指導者 学生間の人間関係におけるケアリング現象を取り上げる研究があったが, これも看護におけるケアリングと同様, 学生の成長という目指す方向性の側面と, その時々関わりの過程そのものとしての側面ととらえることができると考えられる。

#### おわりに

今回, どのように「ケアリング」の概念を現在教育している看護過程の実践の中にどのように取り入れていくのか, またそれをどのように教育するのかを考える基礎的研究として, 文献検討を行った。わが国におけるこれまでの研究により, ケアリング行動の概念が抽出されてきていることが理解でき, 今後の課題はケアリング概念の中範囲理論の確立であることが明確になってきたと思われる。今後中範囲理論の確立が進むことにより, 看護実践や看護教育の中にどのように取り入れていけばよいのかも明確化されることが期待される。

#### 分析した文献

1. 倉田典子: 食事摂取が困難な患者へのケアリングの一考察. 日本精神科看護学会誌, 45(1): 88-91, 2002.

2. 大下美智代，宮原寛子，立川靖代，長浜由紀：小児看護学実習における教員と臨床指導者との協働 プロセスレコードによる指導方法の検討．九州厚生年金看護専門学校紀要，2:39-61，2001．
3. 諏訪さゆり，吉尾千世子，瀧 断子，桑田美代子：痴呆性高齢者の言動の意味の分析 その人らしさを尊重したケア技術確立に向けて．東京女子医科大学看護学部紀要，4：11-18，2001.
4. 中柳美恵子：ケアリング概念の中範囲理論開発への検討課題 看護学におけるケアリングの概念分析を通して．看護学統合研究，1(2):26-44，2000．
5. 伊藤良子：ケアリングを重視した母性看護学臨地実習の試み 新カリキュラムへの移行前後を比較して．京都市立看護短期大学紀要，26：93-99，2001．
6. 小川久貴子，久米美代子，山口栄一：母性看護学実習における熟練看護指導者の一言の意味 Benner の現象学的解釈論を用いて．東京女子医科大学看護学部紀要，3：11-18，2000.
7. 細川順子：臨床におけるケアリング教育 倫理的で探究的な臨床実習のために．神戸大学医学部保健学科紀要，16：59-68，2000.
8. 犬童幹子：癌看護に携わる看護者のケアリングに関する研究 癌看護のケアリングに影響する要因調査，日本がん看護学会誌，14(2):42-54，2000.
9. 坂本京子：終末期がん患者の疼痛に対するマッサージの有効性についての検討．神奈川県立看護教育大学校事例研究集録，23:40-44，2000．
10. 梶原睦子，安田智美，小林祐子，田澤賢次：人工肛門保有者における精神的な健康さ．STOMA，9(3):67-72，2000．
11. 山根順子：術前の不安に対するアプローチ 術前訪問におけるケアリングに焦点をあてて．神奈川県立看護教育大学校事例研究集録，23：91-95，2000．
12. 滝 麻衣，猪城由紀，平野 薫：集中治療室におけるターミナル・ケア ホスピスケアの視点から．日本看護学会論文集 30 回小児看護：145-147，2000.
13. 山崎あけみ：女性の健康に関するケアリングを学ぶ手がかりとなるプロセスの抽出，看護研究，33(1)：71-81，2000.
14. 角谷広子，青木典子，堀田典子，宮岡勤子，岡本真知子，野村裕子，森岡三重子：精神科看護者のケアリングの発達，高知女子大学看護学会誌 24(2)；19-28，1999.
15. 片岡 純，佐藤禮子：終末期がん患者のケアリングに関する研究．日本がん看護学会誌，13(1)：14-24，1999.
16. 松田光信，浅田庚子：悲嘆状況にある患者のケア ケアリングの観点から，看護研究 32(1)：77-83，1999.
17. 岩本テルヨ：ケアリングを成立させる看護婦の要件 慢性難治性疾患患者の経験の分析．北里看護学誌，3(1)：12-19，1997．
18. 操 華子，羽山由美子，菱沼典子 他：患者・看護婦が認識するケアリング行動の比較分析．Quality Nursing，3(4)：359-367，1997.
19. 山崎慶子，佐野ムネ，松平信子 他：ケア・ワーカーたちの現状 労働科学の観点から ヒューマンケアリングのための看護労働時間の検討 プライマリナーシング導入前・2年後の直接看護ケア時間量の比較．保健の科学，37(4):218-225，1995.
20. 柴田秀子，上泉和子，粟屋典子 他：看護ケアの質の評価に関する研究 看護ケアの質を構成する要素の検討 量的調査を用いて．看護研究，28(4)：287-300，1995.
21. 木下幸代：看護から“ケア”へ 新たなる価値づけ ケア/ケアリングの意味するもの．看護学雑誌，58(4)：314-317，1994.
22. 沢田愛子：ケアリング・マインド 安らぎと癒しの文化再建へ．メディカル・ヒューマニティ，22：91-95，1993.
23. 坂本幸子：相談業務 外来患者の不安をやわらげる ケアリングが作りだす不安への援助 短い時間内で相談業務を実践するために．看護，45(11)：26-32，1993．
24. Chinn Peggy L.：ヒューマン・ケアリングの政治的側面(英語)．日本看護科学会誌，12(4)：71-79，1992.
25. Davis Anne J.：ヒューマン・ケアリングの倫理的側面(英語)．日本看護科学会誌，12(4)：59-70，1992．
26. 樋口康子：ヒューマン・ケアリングの哲学的側面(英語)．日本看護科学会誌 12(4):49-58，

- 1992.
27. 羽山由美子, 高田早苗, 木下幸代: 臨床看護の概念化に向けて 看護実践の卓越性とケアリングのパワー「ベナー看護論」を読んで. 看護研究, 26(3): 265-274, 1993.
28. 近田敬子: 看護におけるケアリングの概念「ケアリング」の概念と研究方法を模索して. 看護研究, 26(1): 40-47, 1993.
29. 高田早苗: 気・健康・そして看護 東洋医学と看護の気になる関係 看護とケアリング. エキスパートナース, 7(11): 24-27, 1991.
30. Chao Yu-Me( Yu): ケアリングの諸概念 文化の相違をふまえて. 日本看護科学会誌, 9(2): 38-45, 1989.
31. Watson M. Jean: ヒューマン・ケアリング理論の新次元. 日本看護科学会誌, 9(2): 29-37, 1989.
- ング: 多元論的研究方法を求めて. 看護研究, 26(1): 33-39, 1993.
- 4) 近田敬子: 「ケアリング」の概念と研究方法を模索して. 看護研究, 26(1): 40-47, 1993.
- 5) 筒井真優美: ケア/ケアリングの概念. 看護研究, 26(1): 2-13, 1993.
- 6) 中柳美恵子: ケアリング概念の中範囲理論開発への検討課題 看護学におけるケアリングの概念分析を通して. 看護学統合研究, 1(2): 26-44, 2000.
- 7) 操 華子, 羽山由美子, 菱沼典子, 岩井郁子, 香春知永: ケア/ケアリングの概念の分析. 聖路加看護大学紀要, 22: 14-27, 1996.
- 8) 佐藤幸子, 遠藤恵子, 三上れつ: 基礎看護学分野における書籍に記述された心理社会的側面のヘルスアセスメント内容に関する分析. 山形保健医療研究, 5: 17-24, 2002.
- 9) Jean Watson( 稲岡文昭, 稲岡光子訳): ワトソン看護論. 東京, 医学書院, 1992.
- 10) Madeleine M. Leininger( 稲岡文昭監訳): レイニガー看護論. 東京, 医学書院, 1995.
- 11) Milton Mayeroff( 田村 真, 向野宣之訳): ケアの本質. 東京, ゆみる出版, 1987.

## 引用文献

- 1) 三上れつ著: 看護過程と看護診断(第2版), 東京, 廣川書店, 2001.
- 2) Alfaro-Lefevre, R.( 江本愛子監訳): 基本から学ぶ看護過程と看護診断. 東京, 医学書院, 1992.
- 3) 樋口康子: 看護におけるヒューマン・ケアリ  
2003, 10 31 受稿, 2004, 1 5 受理

## 要 約

目 的: わが国において「ケアリング」の概念・介入方法の確立や, 現在教育している看護過程との関連を明確化していくことが必要である。今回はその基礎的資料とするため, わが国における「ケアリング」に関する研究の動向より, 内容分析を試みた。

方 法: 対象は1983年から2002年の医学中央雑誌にて「ケアリング」というキーワードで検索された原著論文である。分析方法は内容分析的手法を用い, 研究の対象, 方法, 「ケアリング」の理論的背景, 研究の分析内容を中心に分析し, 「ケアリング」概念の明確化を試みた。

結 果: 原著論文は31編であった。定義が明記されていたのは11件であった。その理論的背景は多様であり, また, 同じ理論的背景でも異なる概念で「ケアリング」という言葉が使われていた。質的研究は, 研究の対象が患者であり面接調査でケアリングとなる看護ケアや看護師の要件を抽出したもので, 対象が患者と看護者の関わりでありその介入結果をケアリングの観点から分析したもの, 実習指導場面を対象にしてケアリングの教育について研究したものに分類された。

考 察: わが国におけるこれまでの研究により, ケアリング行動の概念の抽出がすすんでおり, 今後の課題はさらにそれらを進め, 統合体系化をはかり, 中範囲理論を確立することであることが明確になってきたと思われる。

キーワード: ケアリング, 内容分析, 看護教育